

研修報告書No. 9

所 属：聖マリアンナ医科大学 臨床研修センター

研修先：佐川町立高北国民健康保険病院

仁淀川町国民健康保険大崎診療所

「先生、入院が入りますよ」。私が高知県での研修を始めた初日に、浦口先生から内線電話がかかってきた。慣れない電子カルテを操作しながら入院患者の情報を見ると、年齢は103歳。医師になって1年と4か月、これほどの高齢者を診療したことはなかった。研修開始前に、事務スタッフの方から佐川町、仁淀川町、そして高知県の高齢化の状況や医療情勢についてお話を伺ってはいたが、改めてこの地域の実情を目の当たりにしたのであった。私が研修させていただいた、高北病院、大崎診療所はともに、多くの先輩方が研修をされ、その都度、都市部との患者層の違いについて感想を述べられていたが、見ると聞くとでは大違いである。百聞は一見にしかずとは、よく言ったものである。

「もう、何でもやりますよ。カメラも、エコーも。何でも。」とは、浦口先生の言である。都市部の大病院では、ナンバー診療科の廃止以後、臓器別の専門的な診療体制が一般化し「専門医」がもてはやされる傾向がある。しかし、近年になってそうした専門医偏重の問題点が露呈したことから、「総合診療」が注目を集めている。実際、大学病院や市中病院でも、総合内科とか、内科総合診療部などの診療部門が目立つようになってきたし、そうした分野を専攻しようとする研修医も少なくない。しかし現段階では、総合診療の立ち位置は明確になっているとは言えず、身体診察や感染症治療などに軸足を置いている施設が多いように感じられる。だが、ここ高知県での医療を経験すれば、その答えはすぐに見つかるはずだ。本当の意味での総合診療とは何か。地域に根差し、住民とともに歩み、限られた医療資源で求められる医療を可能な限り提供する。こうした地域医療こそが、まさに総合診療なのだと感じた。

この1か月は、地域医療の重要性と楽しさ、そして抱える問題点を教えてくれた。超高齢にもかかわらず、いつの日か再び畑仕事をするのを目指してリハビリに励む女性、通常の間感では施設入所の適応があるが、地域住民の手を借りながら必死に独居で努力する男性、こうした方々とのふれあいは、本当に楽しいものであったが、あるいは将来の日本の医療の未来予想図のようにも思えた。また、チーム医療の重要性も改めて痛感させられた。医師数の絶対的な不足がある以上、すべてを医師が行うのは不可能である。Para-medical スタッフとの緊密な連携、地域住民との連携が、地域医療を推進するには不可欠である。待合室での患者さんと看護師との何気ないやり取りから、体調を崩したお年寄りの存在がわかることすらある。お年寄りには、健康維持のために、百歳体操を一生懸命にやり、出張講義を真剣な眼差しで聴く。地域医療とは「地域の医療を行う」のではなく「地域が医療を行う」のだということをも痛感させられた。

地域医療を学ぶには、1 か月はあまりに短い研修期間であった。しかし私にとってかけがえのない、貴重な 1 か月であった。充実した研修を行えたのは、浦口先生、沖先生をはじめとする指導医の先生方はもちろん、病院スタッフや行政、再生機構の方々、そしてなにより、地域住民の方々の支えがあつてのことでした。心から御礼を申し上げるとともに、高知県の医療がより良きものになることを心から願っております。

1 か月間、本当にありがとうございました。